

〈研究論文〉

ルーブリックを用いた介護実習評価法の開発

林 和歌子 ・ 大内 善広

【要旨】

本研究は、介護福祉士養成施設で必修とされている介護実習の評価法の開発を目的としている。本研究では実習生の評価内容を実習指導者（養成校）、実習生が共有でき、介護福祉士に必要な実践力を身に付けるための具体的な学びの道筋を示すためのルーブリック評価指標案を作成した。さらに評価方法の妥当性の検証では、介護実習終了後の11施設の実習指導者とその施設で実習を行った実習生22名に対し、従来通りの評価方法による評価と、ルーブリック評価指標案を使用し、同一実習生に対して再度評価を実施して、その結果について平均値及び相関分析を行った。その結果、本研究で開発した介護実習の評価法には一定の妥当性が認められた。

キーワード：介護実習、実習評価、ルーブリック

I はじめに

2007年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正により介護福祉士養成施設の介護実習は、実習時間の三分の一以上は、介護実習の実習指導者は介護福祉士のみとされるなど実習教育の充実化が図られている。合わせて実習も含めた養成校卒業時の「学習到達目標」として11項目が明示され、「学習到達目標」に示す内容が、実習生一人一人にどの程度身に付いているかどうかを適切に評価することが養成校には求められている。

しかし介護実習が行われている実践の現場では、その場で起こる様々な出来事に合わせた流動的な対応が必要となっている。実習生もどのような行動や態度をとればよいのか、何が正解なのか、その答えは一つに絞られない中、体験を通して専門的支援や援助方法を臨機応変に学んでいるのが実態である。このような福祉領域の支援・援助の学習を目的とする実習特有の環境では、適切な評価が難しいことが指摘されている（津田 2009；江原 2014；伊澤 2015；工藤 2015；橋本 2016 など）。

Ⅱ 介護実習の学習内容と評価の課題

介護実習のねらいは「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」（厚生労働省社会・援護局長通知、平成 23 年 10 月 28 日）の「教育の事項」に示されている。指針によると、介護実習（450 時間）は以下の二つのことを学習のねらいとしている。①は多様なサービスの理解のために利用者の生活の場で、②については個別ケアの理解のために介護福祉士が一定人数以上働く場で 150 時間以上学ぶように規定されている。

- ①個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。
- ②個別ケアを行うために個々の生活リズムや個性を理解し、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を総合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する学習とする。（厚生労働省社会・援護局長通知 2008）

各養成施設はいくつかの段階に実習時間を分け、段階ごとに施設を変えて学生が学べるよう工夫をしている。したがって養成校は、これらの介護福祉士の「役割理解」と「実践力」について段階ごとに評価することが求められている。

実習評価が難しい理由として、先行研究では介護実習特有の環境が影響していると述べられており五つの課題が指摘されている。まず一つは測定対象である介護福祉士に求められる能力は数値での評価が困難であることである。（宮本ほか 2017）。社団法人介護福祉士養成施設協会（以下、介養協）は、「介護福祉士養成課程における技術習得度等の基準策定に関する調査研究事業」報告書において、介護福祉士卒業の到達時に求められる能力として「人間と社会の理解に必要な基本的能力」「根拠に基づき、介護を計画的に実践・評価する能力」、「利用者の尊厳の保持・自立支援にかかわる介護実践能力」「障害等のある人の理解に必要な基本的能力」「専門職業人として研鑽し続ける能力」の 5 つを提示した。身体能力やコンピューターの操作能力など、ある一定の課題を課しその結果を数値で評価できる能力もあるが、介護福祉士に求められる能力は多様な要素を含み、またそれぞれが複雑に関係しあっている。これらの能力は正誤で答えるペーパーテストや数量などでは表すことができないものである。

第二は介護福祉士に必要な能力の内容や、どのような活動をおこなえば介護福祉士の実践力が向上するのか、その具体的内容も明確になっていないことである（江原、村田 2014）。そのためどのような体験をすることで実践力が高まるのか、何ができたら実践力があるといえるのか、といったことが曖昧なままである。そのため、介護実習で到達目標の設定とそれ

を達成するための教育の段階やプロセスは重要視されているが、その内容の詳細は「～の役割を理解する」などと漠然としている。

第三は、介護実習は実践現場での日常の体験を通して学ぶ教育であることである(林 2007)。加えて複数の学生が同時に実習を行うことから、物理的な場所、実習をする時間、関わる人、起こる出来事も一人一人異なり、三者三様の学び方をしている。したがって実習内容をどのように学ぶかは、実習をする環境への依存が大きい。

四つ目は、多くの養成施設は実習指導者、養成校担当教員が複数で実習教育に関わっていることである。そのことから個人の考えや養成施設、施設の文化などもあり評価者の主観が影響しやすいことも指摘されている(林 2007; 宮本 2017)。

最後に、介護実習は多様な実習体験を複数回行うよう規定されていることも挙げられる。介護実習は学生の主体的能動的な働き掛けによって学習が行われることから、その習得状況は学生の性格や経験などの影響を強く受ける。実習の回数が進むに従い実習内容が高度化していくことを期待し各養成校は各段階に全体的達成課題を設けているものの、課題到達具合も自ずと個人差が大きくなる。学生にとっては前段階の課題を克服するような個別の目標設定が求められる(小柳、中井 2014; 林 2007)。段階ごとに評価を行う一般的な実習評価では、評価結果にコメント欄はあるもののその評価根拠があいまいなため、次の段階へ引き継ぐ実習資料としては内容が十分とは言い難い。

以上のことから、介護実習評価の課題は、①数値では測定が難しい力を測ること、②養成校、実習施設、及び実習生も学習の到達状況を意識しにくく共有しにくいこと③施設間、施設と養成校、実習指導者間などによってバラつきが出やすいこと、④評価者の主観に左右されやすいこと、⑤次の実習に学習到達状況を繋ぐ資料としての工夫が必要、と整理できる。これらの課題を克服するために養成校はさまざまな手立てを講じつつも、学生が身につけた力を明確に測る評価法を持たずに現在に至っている(林 2007; 小柳ほか 2014; 宮本ほか 2017; 大崎 2013; 福田 2017 など)。

このような状況下において、近年、評価者と学習者が共に学習目標や判断基準を認識できるものとして注目されているものにルーブリックがある。ルーブリックとは、実技や作品などを評価するパフォーマンス評価の一つであり、学習到達状況を評価するための評価基準のことである。またペーパーテストでは評価が困難な能力や態度の評価に向いているといわれている(Dannelle 2014)。ルーブリックは評価基準が定められていることから、評価者間のバラつきが少なくなることや、評価尺度があることにより到達度も意識しやすく、ここ数年は保育実習や社会福祉士、理学療法士、看護師の実習教育評価においても注目されている(福田 2017; 橋本 2016; 糸賀 2017; 小林 2014; 宮本ほか 2017; 尾崎 2017 など)。介護実習では学習初期のジェネリックスキルや実習記録を評価対象としたルーブリック作成の試みが既に行われているが、実習終了時期までの全体を評価対象とするルーブリックは見当たらない。

以上の背景を踏まえ、本研究では実習生の評価内容を実習指導者と養成校、実習生が共有

でき、介護福祉士に必要な実践力を身に付けるための具体的な学びの道筋を示すためのルーブリックを使用した評価表の構築を目指すものとする。

Ⅲ パフォーマンス評価とルーブリック

パフォーマンス評価とは、実際に行われている課題や活動の行動や態度の「出来ばえ」を直接評価するものである。パフォーマンスは具体的な状況の中で様々な要素が一体となって表現されるものであるため、評価者にはそのパフォーマンスを分析する基準が必要になる。ルーブリックとは「パフォーマンス（作品や実演）の質を評価するために用いられる評価基準のこと」で、「一つ以上の基準（次元）とそれについての数値的な尺度、および、尺度の中身」（松下 2012）の説明を、多次元、段階的にマトリックスで表現されているものである。ルーブリックは評価者の主観に左右されにくいことや、評価の過程が可視化されるとともにその結果と一致させることができるといわれている。

ルーブリックの利点は、評価者側にとって評価に主観が入らないことから、成績評価の一貫性と公平性が確保され、学生の学習状況や修得状況が正確に把握できるという点がある。さらに学習者にとっても事前に評価基準が明確になり、学習活動や自己評価の指針としての役割を果たす。さらに、ルーブリックを活用し振り返ることで、何ができなくて、何ができたのか、次の目標は何かといったより高い学習成果を発揮することができるようになる。

介護実習はパフォーマンスの一つに含まれ介護実習評価はパフォーマンス評価である。ルーブリックを用いることで、数値化しにくいパフォーマンスの評価が可能となり、一貫性と公平性が保たれる。さらに学習目標が明確になり、段階的に継続して活用できる。以上のことから本研究では介護実習の評価にルーブリックを採用することとした。

Ⅳ 本研究の目的

本研究ではこれまでの評価表で不明確だった介護実習の評価内容の抽出を行い、適切に評価するためのルーブリックを取り入れた評価指標を試作し、その妥当性を検討する。

Ⅴ 研究方法

1. ルーブリックの作成

ルーブリックについては、学生と実習指導者、それぞれの意見を取り入れながら作成した。

(1) 対象者

研究対象の学生と実習指導者は以下の通りである。

- a) 2014年度に介護実習を経験した学生2～4年生の計60名である。実習段階は第1段

階 17 名、第 2 段階 18 名、第 3 段階 25 名である。実習施設種別は特別養護老人ホーム 37 名、老人保健施設 14 名、障害者支援施設 7 名、認知症対応型共同生活介護 2 名であった。

b) 実習指導者は 2 回実施した介護実習研究会に参加した実習指導者延べ 29 名（第 1 回 11 施設 12 名、第 2 回 12 施設 17 名）である。性別は女性 24 名、男性 5 名で、年齢は 30～39 才が 16 名、40～49 才が 9 名、50～59 才が 4 名であった。実習指導者としての経験年数は 5 年未満が 11 名、5 年以上 10 年未満が 10 名、10 年以上が 8 名であった。実習指導者が所属する施設は高齢者施設 17 名、老人保健施設 9 名、障害者支援施設 3 名であった。

(2) 研究期間

a) 学生は 2015 年 7 月 2 日に行われた介護総合演習授業内。

b) 実習指導者は 2015 年 7 月 9 日（第 1 回介護実習研究会）、2016 年 3 月 10 日（第 2 回介護実習研究会）である。

(3) 方法

研究の方法は以下の通りである。

①学生に対し「各評価項目で、実習中の自分のどのような行動・態度が評価対象となったと思うか」と問いかけ、評価項目ごとに自由記述のアンケートを行う。

②実習評価見直しを目的に研究会開催を呼びかけ協力を得た実習指導者と 2 回の研究会を通し検討を行う。第 1 回研究会では既存の評価表、及び学生のアンケートを基に、ルーブリックの構成要素である「課題」（めざすべきパフォーマンス）、「観点」（課題に必要なスキル）、「評価の区分」（評価のレベル）、「評価基準」（観点と評価の区分により規定される内容）について、KJ 法の手順を用いて実習指導者と検討を行う。第 2 回研究会では、第 1 回研究会のやり残した項目の検討とともに、第 1 回研究会で得た内容から作成したルーブリック案に対して意見交換を行う。なお、第 2 回研究会で作成したルーブリック案に関しては、妥当性の検証の際、記述式で意見を聴取した。

2. ルーブリック案の妥当性の検証

次に作成したルーブリック案の妥当性の検証を行った。

(1) 対象者

2016 年度本学介護実習を受け入れた施設のうち、2016 年 3 月 9 日に実施した介護実習意見交換会に出席した 11 施設の実習指導者である。実習指導者が所属する施設の種別は、特別養護老人ホームが 6 名、老人保健施設 5 名、障害者支援施設が 2 名であった。評価対象となる学生は 22 名である。性別は男性 11 名、女性 11 名で、実習段階は第 1 段階が 6 名、第 2 段階が 5 名、第 3 段階が 11 名であった。

(2) 研究期間

2016 年度介護実習（介護実習Ⅰ：2017 年 2 月、介護実習Ⅱ、Ⅲ：2017 年 2 月～3 月）終了後の評価採点時。

(3) 方法

調査方法として同一評価者による、同一人物に対する二通りの評価を実施した。

①実習終了後の評価採点時に、従来通りの評価方法による評価を行う。

②「評価対象となる実習生の行動・態度」を検討・作成したルーブリック評価指標案を用い、同一実習生に対して①と同じ評価者が再度評価を実施する。

③同一実習生に対して「従来通りの評価方法でつけた評価」結果と、「ルーブリック評価指標案を用いてつけた評価」結果について平均値及び相関分析を行う。

VI 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守した。調査を行うに当たり学生及び実習指導者に対し、研究目的・方法、結果データの取り扱い、個人情報保護、自由意思による参加等について説明をおこない、同意を得たうえで行った。

VII 結果

1. ルーブリックの作成

実習指導者と、既存の評価表（図 1）の項目と介護協作成「介護福祉士養成課程における技術習得度等の基準策定に関する調査研究事業」の介護福祉士の卒業時の到達時に求められる能力に照らした。その結果、これまでの評価表の項目に求められる能力は全て含まれていることを確認し、引き続き評価項目はルーブリックに取り入れることにした。そのうえでルーブリックの4つの構成要素について討議を行い、評価指標案を作成した（図 2）。ルーブリックの各構成要素の検討結果は以下の通りである。

(1)「課題」：実習指導者と既存の評価表で提示している内容の検討を行い、目標とするパフォーマンスについて記述されていることを確認した。

(2)「観点」：実習指導者との協議により提示された内容をもとに、全体の表現の統一、わかりやすい説明に整理するとともに、学生アンケートの結果から内容の補足や具体的内容の提示が必要なものは言葉を加えた。

(3)「評価の区分」：これまで使用していた A、B、C、D の4区分法は本学の成績評価でも用いられており学生にとっても馴染みがあると考え、引き続き同じ区分法を採用した。

(4)「評価基準」：測定可能な行動や態度が含まれていること、評価基準の差異を明確にすること、評価基準となる行動態度を具体的かつ肯定的な表現で記述すること、を留意して検討した。評価基準の綿密化は評価の負担を増やすことから、あまり望ましくないが、特に言葉を加えた項目は以下のとおりである。

①評価項目「利用者理解」の「利用者との関係づくり」は、学生アンケートの有効回答

数の半数以上が「主体的、積極的なかわり」に近い表現であった。評価項目「倫理・態度」に「積極性のある行動がとれる」とあるため実習指導者の意見ではここで積極性に触れてはいなかったが、「話しかけ」に「自ら」と積極性に係る表現を加えることにした。

②評価項目「個別ニーズの把握ができる」の「高齢者・障害者の基礎知識」と、「守秘義務」の「SNSの管理」、「礼儀」の「身だしなみ」については、実習指導者から基準が細かすぎるという意見もあった。しかし、学生アンケートの回答には全く触れられていなかったことから、学生の認識が低いと判断し意図的にそのまま観点に含めることにした。

③学生アンケートの有効回答数が半数以下と学生にとって具体的なイメージを持ちにくいと思われる評価項目は、「倫理・態度」の「協調性のある行動がとれる」「責任感のある行動がとれる」であった。規則やルールや、約束という具体的状況を想定して記述した。

2. ルーブリック案の妥当性の検証

2016年度に実習施設を受け入れた施設で実習評価をつける3月に妥当性の検証を行った。その方法は評価指標15項目の評価指標に対して、従来通りの評価方法による点数とルーブリック評価指標案に基づく点数の平均値を算出し、平均値の差について対応のある t 検定を実施した。また、2つの評価指標の関連を見るために相関係数を算出した(表1)。

まず、従来通りの評価とルーブリックによる評価について、各評価指標で平均値の差を対応のある t 検定によって検討したところ、「(5) 介護職員の役割がわかる」について有意な差が見られた。また、「(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる」「(8) 長期目標・短期目標を適切に設定し、介護計画が立てられる」「(9) 介護計画にそって実施し、評価ができる」「(10) 施設が地域に果たしている役割がわかる」の4項目に差の有意傾向が見られた。これらの平均値は全てルーブリックによる評価指標を用いた方が低い値になっていたことから、この5項目はルーブリックによる評価指標を用いることによって、より厳しく評価されることが示された。

相関分析の結果は、従来通りの評価方法とルーブリック評価指標案を用いた評価方法間に有意な相関を示している項目は12項目であり、ルーブリックによる評価の妥当性、即ち、概ねルーブリックによる評価指標は、従来通りの評価指標と評価している内容が一致していることが示された。一方、「(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる」「(10) 施設が地域に果たしている役割がわかる」「(11) 守秘義務を理解し、行動がとれる」の3項目については有意な相関が見られず、これらの項目については、実習指導者の評価視点と学校が提示する学習目標が一致していない可能性があることが示唆された。

介護実習評価表

実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科介護福祉コース

実習生	学 籍 番 号		学 生 氏 名	
実習先	施 設 名	施 設 長 名	実 習 指 導 者 名	
実習期間	自(始) 年 月 日 ~ 至(終) 年 月 日			
評 価： 下記評価項目について、該当する評価A～Dをご記入ください。 【 A：優 (80点以上) B：良 (70点以上80点未満) C：可 (60点以上70点未満) D：検討を要する 】				
	内 容	評 価	所 見 (必要な場合のみご記入ください)	備 考
利用者 の理解	(1)利用者との関係づくりができる			
	(2)個別のニーズの把握ができる			
介護 技術	(1)利用者の個別性及びその人の生活環境に対応した、日常生活に関する介護技術を習得している			
	(2)介護記録が書ける			
役割と チーム ケア	(1)介護職員の役割がわかる			
	(2)自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる			
介護 過程	(1)情報の解釈、統合化を行い、ニーズを明確にすることができる			実 習 Ⅰ で は 評 価 し な い
	(2)長期目標・短期目標を適切に設定し、介護計画が立てられる			
	(3)介護計画にそって実施し、評価ができる			
社会 関係	(1)施設が地域に果たしている役割がわかる			
倫理・ 態度	(1)守秘義務を理解し、行動がとれる			
	(2)礼儀を理解し、マナーを守る			
	(3)積極性のある行動ができる			
	(4)協調性のある行動ができる			
	(5)責任感のある行動ができる			
実習指導者の総合評価 (今回の実習で努力が見られた点、また今後の課題などについて、できるだけ具体的にご記入ください。)				

上記の通り評価します。

平成 年 月 日

【実習施設・施設長】ご署名：.....印

図 1 既存の評価表

表1 15項目の評価指標における基本統計量と相関係数、t検定結果

指標	従来			ルーブリック			t検定		
	平均	SD	n	平均	SD	n	t	p	r
(1) 利用者との関係作りができる	3.32	0.84	22	3.09	0.75	22	1.42	0.17	.56**
(2) 個別ニーズ把握ができる	2.77	0.75	22	2.82	0.80	22	0.57	0.58	.88***
(3) 利用者の個性及びその人の生活環境に対応した、日常生活に関する介護技術を習得している	2.73	0.55	22	2.73	0.63	22	0.00	1.00	.74***
(4) 介護記録が書ける	3.00	0.87	22	3.05	0.79	22	0.44	0.67	.83***
(5) 介護職員の役割がわかる	3.32	0.72	22	2.77	0.75	22	3.46	0.00	.49*
(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる	2.73	0.46	22	2.50	0.60	22	1.74	0.10	.35
(7) 情報の解釈、統合化を行い、ニーズを明確にすることができる	3.25	0.86	16	3.13	0.89	16	0.81	0.43	.75***
(8) 長期目標・短期目標を適切に設定し、介護計画が立てられる	3.00	0.82	16	2.69	0.70	16	2.08	0.06	.70**
(9) 介護計画にそって実施し、評価ができる。	3.21	0.80	14	3.00	0.82	13	1.90	0.08	.86***
(10) 施設が地域に果たしている役割がわかる	3.00	0.52	16	2.63	0.81	16	1.86	0.08	.32
(11) 守秘義務を理解し、行動がとれる	3.64	0.49	22	3.59	0.50	22	0.37	0.71	.33
(12) 礼儀を理解し、マナーを守れる	3.45	0.74	22	3.41	0.67	22	0.37	0.71	.67***
(13) 積極性のある行動ができる	3.27	0.70	22	3.18	0.73	22	1.00	0.33	.82***
(14) 協調性のある行動ができる	3.23	0.61	22	3.23	0.61	22	0.00	1.00	.49*
(15) 責任感のある行動ができる	3.32	0.78	22	3.50	0.60	22	1.16	0.26	.46*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

VIII 考察

以上の検討から次の二点について検討すべき課題が抽出された。

1 つは、ルーブリックによる評価指標が実習の中で到達すべき目標よりも高い目標を据えてしまっているという観点である。統計的に差が示唆された5項目については、今後、評価の基準を見直し、現状のルーブリック上の目標が妥当であるのか、あるいは目標とする内容をもう少し低く設定するかを検討していく必要がある。

2 つ目の観点は、実習段階による問題である。今回の分析では、収集できたデータ数が十分とは言えないため、実習段階による平均値の差まで検討することはできていない。一方で、初めての实習段階においても最終的な到達目標を把握することができるようにするという教育上の配慮により、使用したルーブリックは実習段階によらず同一のものを使用している。

ルーブリック評価の方が5項目において高い目標が据えられ、結果として厳しい評価となっているという今回の結果は、実習段階によって、ルーブリック上で記載されている行動内容が実施できているかどうかと、A、B、Cといった実際の評価の対応関係を変えて評価していく必要があることを示していると考えられる。実習指導者との協議では、段階ごとの評価表については、限られた実習時間の中で到達目標を区切ってしまうことは、学ぶ機会や

学びたいという意欲を削ぐことにはならないか、学生が近視眼的になってしまう可能性があるのではないか、また実習場所や対象者が変わることによって前段階では到達できたことも再学習が必要となる可能性もあること等の意見が見られた。そのため、最初の段階から最終目標まで意識した取り組みがどの段階でもできるよう、今回作成したルーブリックは実習段階によらないものとした。しかし、その点については、従来通りの評価方法では評価者が各実習段階を考慮して評価しているのではないかと考えられる。各実習段階で考慮している内容の詳細を検討しながら修正していきたい。

さらに、実習指導者の評価視点と学校が提示する学習目標が一致していない3項目については、従来通りの評価ではどのような観点で評価しているのかを再度見直した上で、ルーブリックの評価基準の修正を検討する必要があると考える。

しかし、全体としては今回作成したルーブリック評価指標案は妥当性が確認できたと考えられ、完成形とまではいかないものの、一部を修正した上で、実際に実習指導の中で使用に耐えうるものであると考えることができると判断した。

VIII 今後の課題

今回、ルーブリック妥当性の検証を行ったが、本来、ルーブリックに完成はないと言われている。ルーブリックに記載されている評価内容は実習現場で起こりそうなことを想定して選んだが、すべてのことを含まれているとは限らない。またここに書かれていないことを学生が意識しなくなることや、実習評価者が求めなくなってしまうことも考えられる。そこで評価指標案を使用しつつも、その内容の見直しは終わりがないのである。

2017年度はこの評価指標案を基本としルーブリックを用いた評価方法の試行を行う予定である。また2019年度には介護福祉士養成カリキュラムの改正も予定されている。今後、引き続き、実習生、実習指導者、養成校教員とオープンな協議を行い、評価指標案の見直しと妥当性の検証を重ね、質の向上を試みたいと考えている。

【参考文献】

Dannelle D. Stevens, Antonia J. Levi, 著;佐藤浩章監訳(2014)「大学教員のためのルーブリック評価入門」

玉川大学出版部.

江原隆宜、村田泰弘(2014)「相談援助実習の「実習評価」に関する批判的考察:「実習評価」の目的、対象、主体・方法」日本福祉大学社会福祉論集(131),55-73.

江原隆宜、村田泰弘(2014)「相談援助実習の「実習評価」に関する批判的考察:「実習評価」の目的、対象、主体・方法」日本福祉大学社会福祉論集(131),55-73.

福田洋子、青木信子、野呂健一、ほか(2017)「介護実習におけるルーブリック評価の提案」高田短期

- 大学キャリア研究センター紀要・年報 (3), 51-61.
- 橋本菊次郎、今井 博康、寺田香 (2016)「精神保健福祉援助実習評価スケールの検討 (第1報): HIT モデルの開発に向けて」北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 7, 245-264.
- 林信治 (2007)「介護実習の評価について考える: 介護実習評価表の改訂を通して」東海学院大学紀要 1, 69-75.
- 広瀬美和、大内善広、小川智子ほか (2016)「ルーブリック版実習評価尺の開発」城西国際大学福祉総合学部紀要第 24 巻第 3 号.
- 糸賀暢子、元田貴子、西岡加名恵 (2017)「看護教育のためのパフォーマンス評価: ルーブリック作成からカリキュラム設計へ」医学書院.
- 関西学院大学実践教育研究会編 (2014)「ソーシャルワーク実習プログラミングワークブック 実習先—養成校—実習生が協働するメリット」みらい.
- 厚生労働省 (2008)「介護福祉士養成課程における 教育内容等の見直しについて」
(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html, 2017.11.13).
- 厚生労働省社会・援護局長通知 (2008)「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」
- 小林哲也、佐々木幸、川廷宗之、ほか (2014)「社会福祉士養成における相談援助実習指導の評価方法に関する研究: —ルーブリック評価法の応用可能性について—」大妻女子大学人間関係学部人間生活文化研究 2014 (24), 168-180.
- 工藤雄行、山口かおる (2015)「本学における介護実習評価の特徴と課題: 実習施設評価と学生自己評価の比較を通して」弘前医療福祉大学短期大学部紀要 3(1), 95-102.
- 松下佳代 (2012)「パフォーマンス評価による学習の質の評価: 学習評価の構図の分析にもとづいて」京都大学高等教育研究第 18 号, 75-114.
- 宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、ほか (2017)「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするルーブリック評価の試作と活用」帝京科学大学紀要 13, 77-86.
- 村山航 (2006)「教育評価」鹿毛雅治 (編) 朝倉心理学講座 8 教育心理学、朝倉書店 173-194.
- 沖裕貴 (2014)「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」立命館高等教育研究 (立命館大学教育開発推進機構) 14 号, 71-90.
- 尾崎司、中村教子 (2017)「現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (1) 保育所実習のルーブリック作成に関する予備的考察」東京家政大学研究紀要 57 (1), 31-41.
- 社団法人日本介護福祉士養成施設協会 (2012)「介護福祉士養成課程における技術習得度評価等の基準策定に関する調査研究事業報告書」
- 田中耕治 (2007)「教育評価」荒木紀幸 (編著) 教育心理学の最先端—自尊感情の育成と学校生活の充実—、あいら出版 105-121.
- 田中耕治 (2008)「教育評価」岩波書店

- 田中耕治（2011）「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」ぎょうせい
- 津田理恵子（2009）「介護福祉実習における養成校の課題—養成校教員と施設指導者の実習に関する調査結果から—」『厚生指標』第56巻第5号, 10-16.
- 山田嘉徳、森朋子、毛利美穂、ほか（2015）「学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討」『関西大学高等教育研究』, 6:21-30.
- 山下喬之、田口光、長津秀文、ほか（2016）「ルーブリックで理学療法士養成課程における臨床実習の成績評価が生まれかわる」『理学療法科学』 31(6), 915-923.

Developing an Evaluation Method Based on Student Performance in Care-Work Practicum.

Wakako Hayashi, Yoshihiro Oouchi

Abstract

This paper examines how to develop a method of assessment to evaluate student performance in a care-work practicum. The research is divided into two parts. The first part involved creating a rubric to enhance inter-rater agreement between University students and field instructors. The purpose of creating a rubric was to help the students get a clear idea of the learning process, and to help them understand which areas of their studies needed improvement. The second part of the study investigated the validity of scores obtained from the rubric. The 23 students who participated in the care-work practicum at 11 different facilities were assessed in the following two ways; the traditional non rubric based method of evaluation and a post practicum method of evaluation using a carefully designed rubric.

Mean-value analysis and correlation statistics were used to analyze the results. The findings of the present study indicates that the rubric to enhance inter-rater agreement between University students and field instructors can produce adequate reliable and valid scores.

Key words: Care-Work Practicum, performance evaluation, rubric